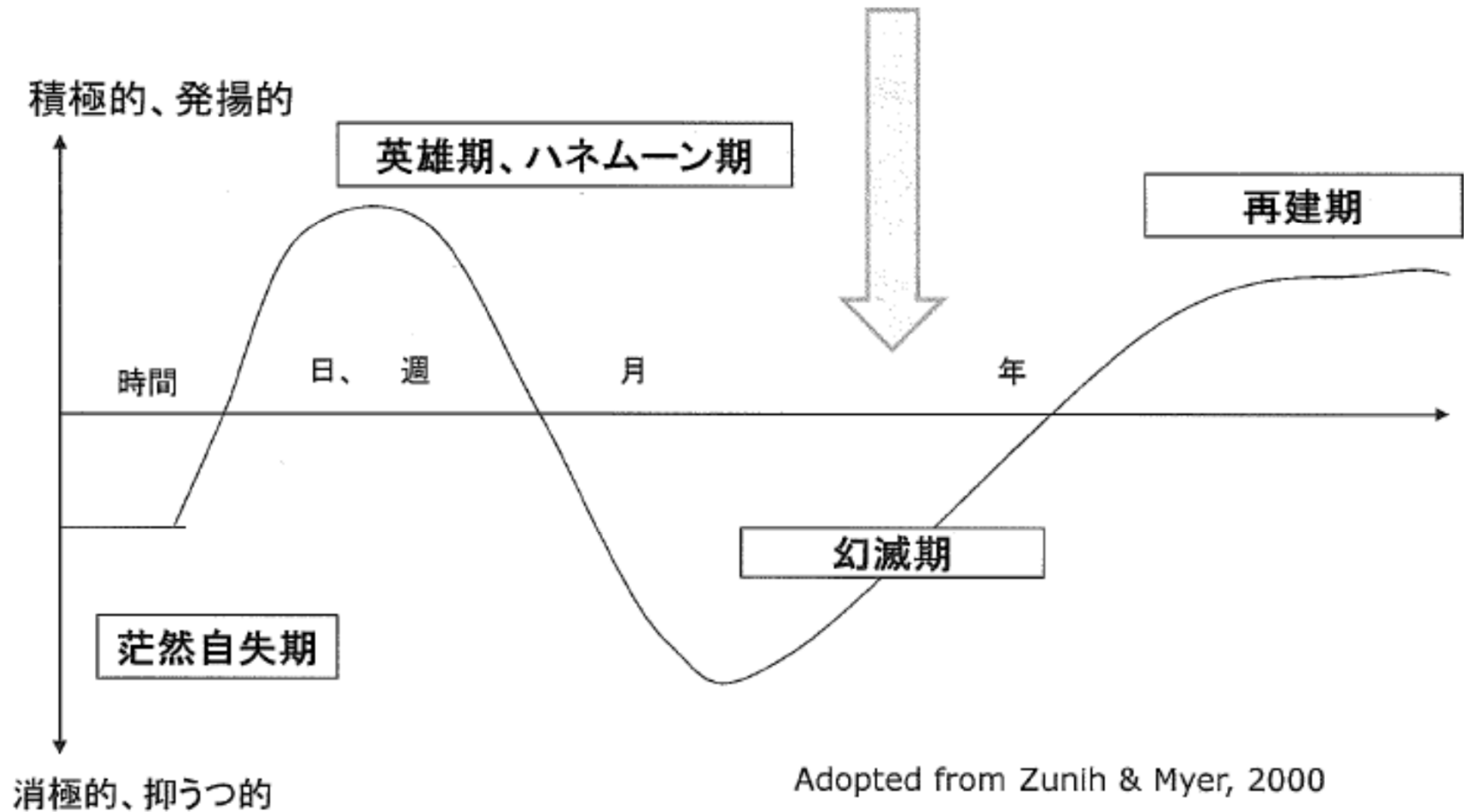


資料2

過去の震災に伴う意識面などの 変化に関する先行研究

内閣府経済社会総合研究所
幸福度研究ユニット

災害と心の回復の時間的経過



(出典) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所・金吉晴氏からの提供資料

震災後の人生観の変化

第1因子	寄与率	因子別因子負荷量		
日常観	34.2%	I	II	III
3. 人と人とのつながりの大切さがわかった。		.81	.08	.08
4. 家族の絆の強さを感じた。		.79	.16	.02
5. 普通の生活のありがたさがわかった。		.69	.01	.32
6. 自分を見つめ直した。		.55	.40	.29
第2因子	寄与率	因子別因子負荷量		
無常観	14.1%	I	II	III
10. 他人に対する信頼感がなくなった。		-.16	.74	.23
11. 物欲がなくなった。		.37	.68	-.08
9. 自分の生き方に自信がなくなった		.12	.66	.41
2. 無常観を感じた。		.38	.62	.05
7. 神仏を信じるようになった。		.36	.56	-.05
第3因子	寄与率	因子別因子負荷量		
享楽観	9.4%	I	II	III
8. 人生を今楽しまないと損だと思った。		.12	-.03	.79
9. 環境の安全性に対する信頼感がなくなった。		.21	.25	.53

- (備考) 1. A大学において行われたオープンセミナー受講者を中心とした近隣地域在住者374名とA大学の1年生から4年生までの学生228名の計602名(期間: 阪神大震災後1995年7月)における回答を分散分析した結果
 2. 因子Iは「日常観」因子、IIは「無常観」因子、第3因子を「享楽観」。因子負荷量の数字が高いほど、影響が大きい。
 (出典) 日下 菜穂子、中村 義行、山田 典子、乾原 正(1997年)「災害後の心理的变化と対処方法: 阪神・淡路大震災6か月後の調査」教育心理学研究45(1)、日本教育心理学会

PTSD・人生観・災害観と 基本属性・被災状況との関連性

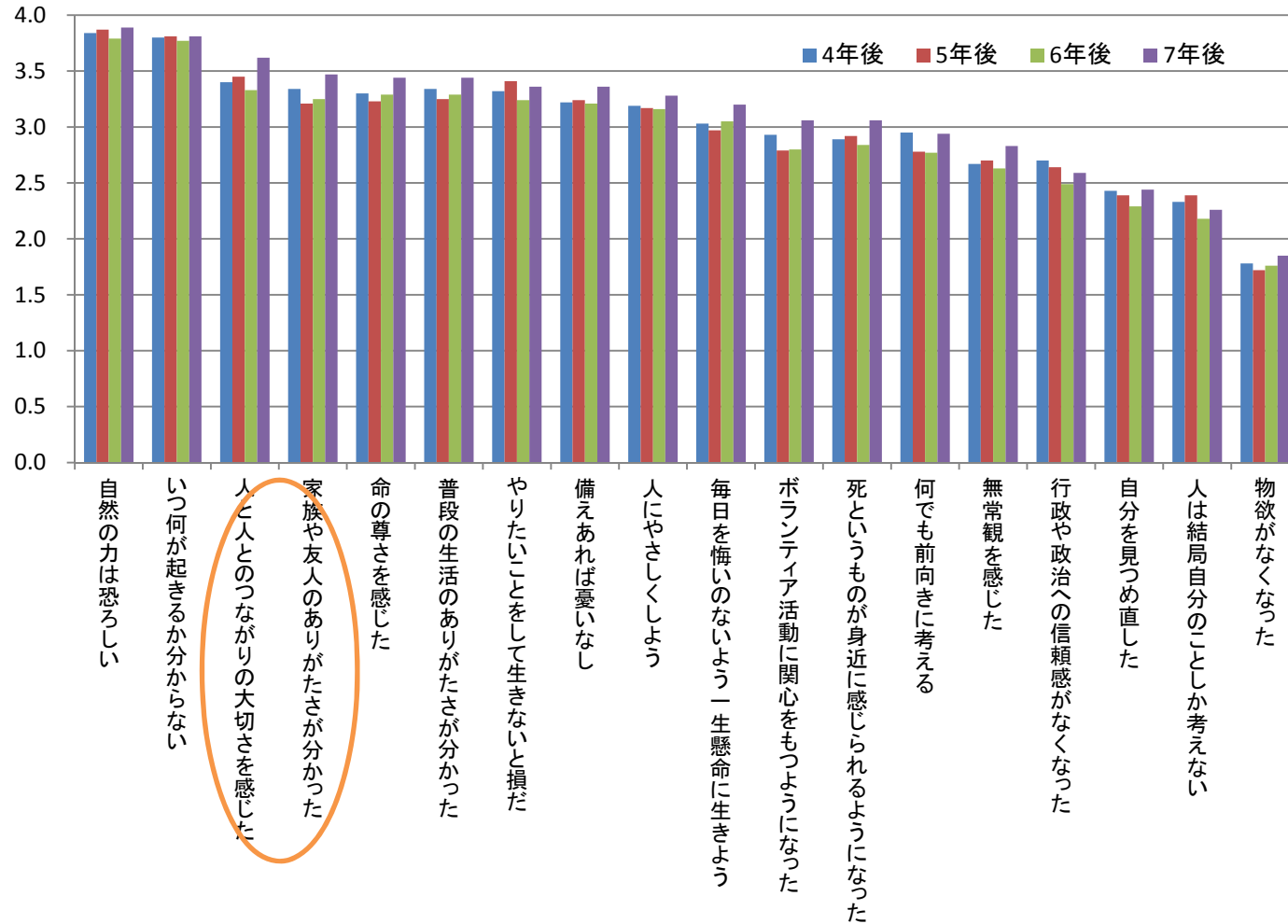
	PTSD	人生観	災害観	立ち直りのための対処方法	
				情動的対処方法	行動的対処方法
性	(再体験) 女性>男性	(日常・無常・享楽) 女性>男性	(仕返し) 女性>男性 (自然現象) 男性>女性	(愛着) 女性>男性	(トークング) 男性>女性 (行事) 男性>女性
年齢	(総得点・再体験・回避・過緊張・職責感) 60以上>30~59>29以下	(日常・無常) 60以上>30~59>29以下	(天譴論・仕返し・自然現象・運命) 60以上>30~59>29以下	(愛着・リーダー・帰属・統制・希望) 60以上>30~59>29以下	(未来・生活・トークング・行事) 60以上>30~59>29以下
家屋損傷	(総得点・再体験・回避・過緊張) 全半壊焼>一部損壊>なし	(日常・無常) 全半壊焼>一部損壊>なし	(自然現象) 一部損壊>なし>全半壊焼 (天譴論・仕返し・運命) 全半壊焼>一部損壊>なし	(愛着・リーダー・帰属・統制・希望) 全半壊焼>一部損壊>なし	(未来・トークング・行事) 全半壊焼>一部損壊>なし
死の意識	(総得点・再体験・回避・過緊張) あり>なし	(日常・無常) あり>なしなし	(天譴論) あり>なし (自然現象・運命) あり<なし		(トークング) あり>なし

(備考) 1. A大学において行われたオープンセミナー受講者を中心とした近隣地域在住者374名とA大学の1年生から4年生までの学生228名の計602名(1995年7月)における回答を分散分析した結果。

2. 女性、高齢者の方ががPTSD、人生観、災害観など、震災の影響を強く受けていること、家屋の損傷の程度がひどい人ほど対処方法を多く試み、人生観が変化し災害の意味づけを行っていたことなどがわかる。

(出典) 日下 菜穂子、中村 義行、山田 典子、乾原 正(1997年)「災害後の心理的変化と対処方法：阪神・淡路大震災6か月後の調査」教育心理学研究45(1)、日本教育心理学会より作成。

震災後の考え方の変化 (平均値)

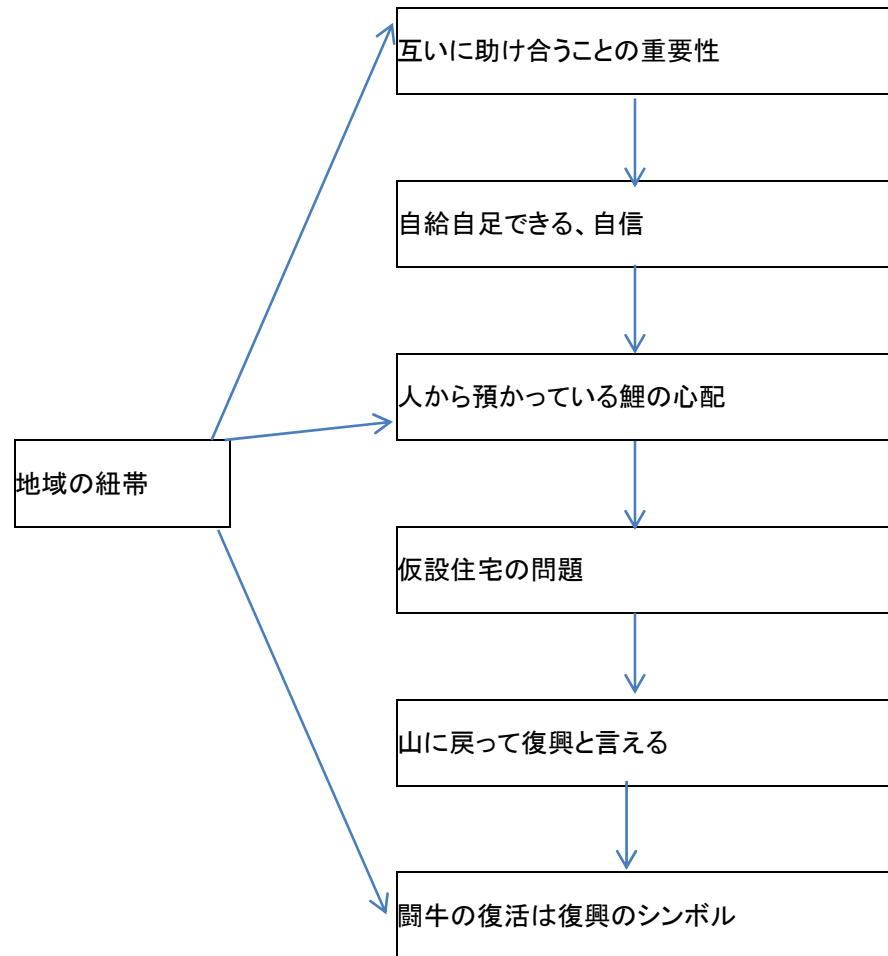


(備考) 1. 図の数値は、震災後の考え方の変化について 4「とてもそう思う」、3「ややそう思う」、2「あまりそう思わない」、1「まったくそう思わない」とし、それを平均値として取った値

2. 対象は関西学院大学の学生735名(震災後4年5ヵ月後、5年5ヵ月後、6年9ヵ月後、7年3ヵ月後の4回。すべての調査時点で対象は同一でない。)

(出典) 関西学院大学・西本 実苗氏からの提供資料。

被災住民の復興への意識変化

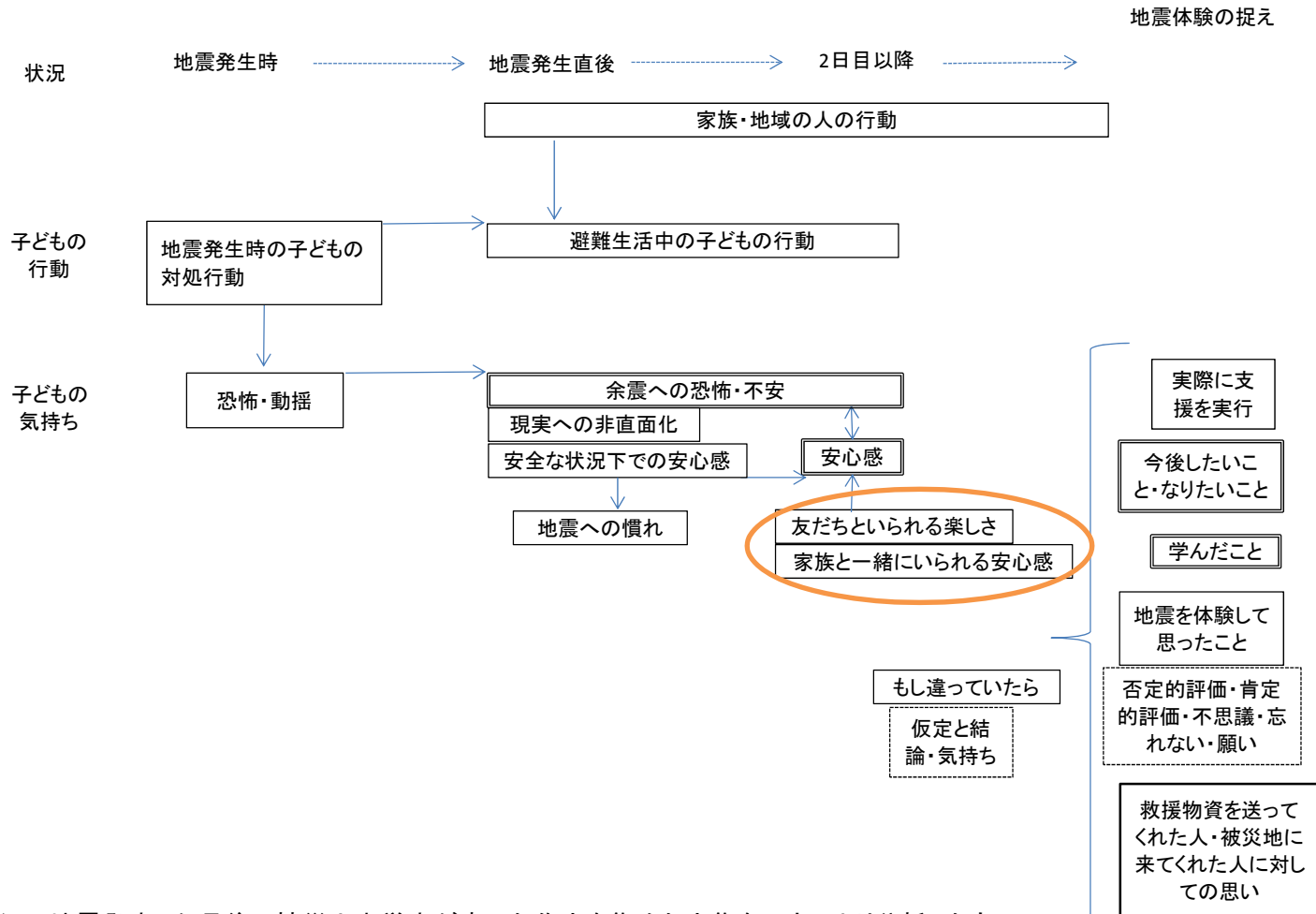


(備考) 1. 2007年3, 9, 11月及び2008年9月に小千谷市在住の被災者に対する面接調査結果をグラウンデッド・セオリー・アプローチにより分析した結果。

2. この被調査者の意識変化には、「地域の紐帯」がそれぞれに強く働きかけていることや、復興とは元のちに戻り元の仕事に戻ってこそ、と考えていることが分かる。

(出典) 水田 恵三(2009)「新潟中越地震後の復興に関する研究」尚綱学院大学紀要57

震災を体験した児童の心理



(備考) 1. 地震発生2か月後に被災小中学生が書いた作文を集めた文集をKJ法により分析したもの。

2. 親や家族の存在が子どもの行動や思考に影響を与えていたこと、友達の影響が安心感に影響を与えていたことなどがわかっている。

(出典) 小林 朋子 (2007) 「震災を体験した小学校高学年の子どもの心理」 静岡大学教育学部研究報告. 人文・社会科学篇 58号 171 ~179頁